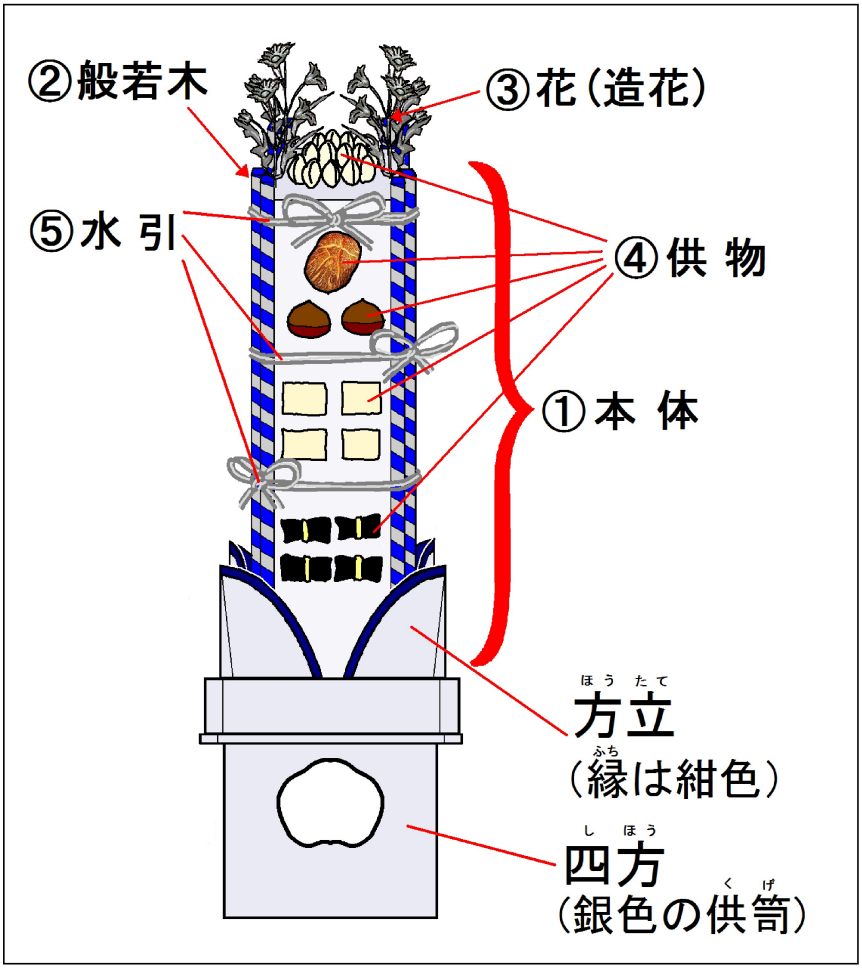
根菓餅（こんかぺい）の製作例



左図は葬儀用の根菓餅の参考例です。

本体の５面（胴体の４面と上面）に、供物を貼り付けて飾ります。
葬儀用の根菓餅には銀濃（ぎんだめ＝銀色）の四方（四角の供筒）を用います。

①本　体（およそ14cm×14cm×43cm）

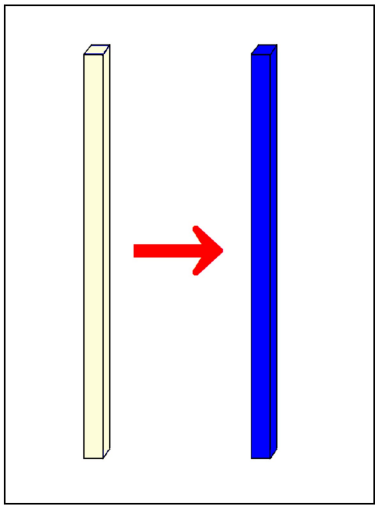
大きめの一升瓶の箱（142×142×428mm）がちょうど良いサイズで、便利です。（昔は角材を用いていたそうです。）段ボールで自作しても良いです。
※風が強い場所に設置する場合は、安定させるために、箱の中に「重し」を入れておきます。
本体は、全面に銀紙を貼ります。（銀スプレーで塗装するのも良いでしょう。）

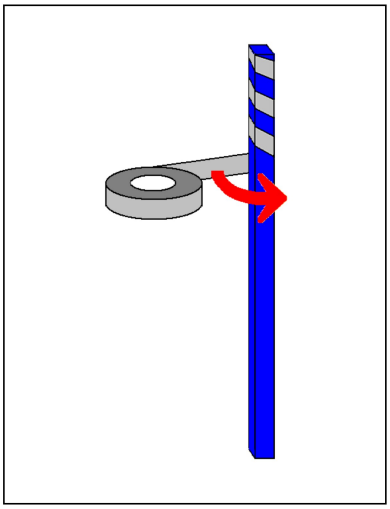
②般若木（はんにゃぎ）

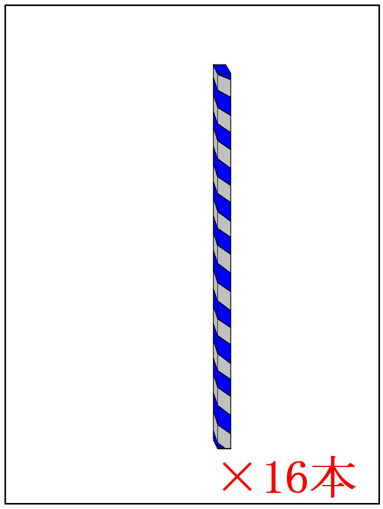
本体の四隅に付ける計８本の木を「般若木」と呼びます。

般若木は、１cm角の角材で、本体より２cmほど長くします。

※ホームセンターなどで、9mmないし12mm角、長さ1,820mm（または910mm）の角材が売られています。それを455mmに切ると、ほど良い長さになります。

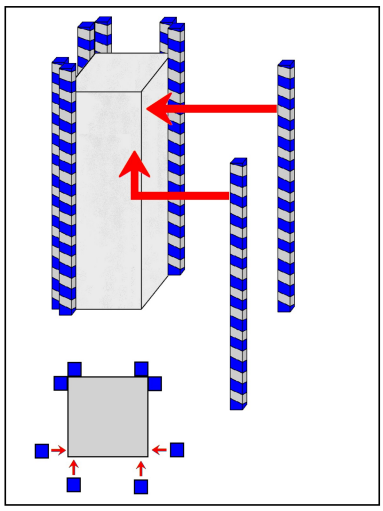






用意した角材の全面に紺（または青）色のビニールテープを巻きます（塗装しても良い）。そうして出来上がった「紺（青）色の棒」に、１cm幅の銀色テープを螺旋状に巻きます。

本体１つに般若木を８本取り付けるので、１対なら16本必要です。



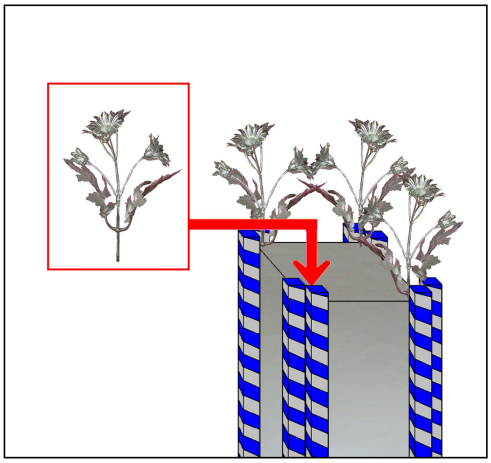
※般若木の取り付け

本体の四隅に「般若木」を、両面テープなどで取り付けます。（般若木は本体の上端よりも２cmほど上に出します。）

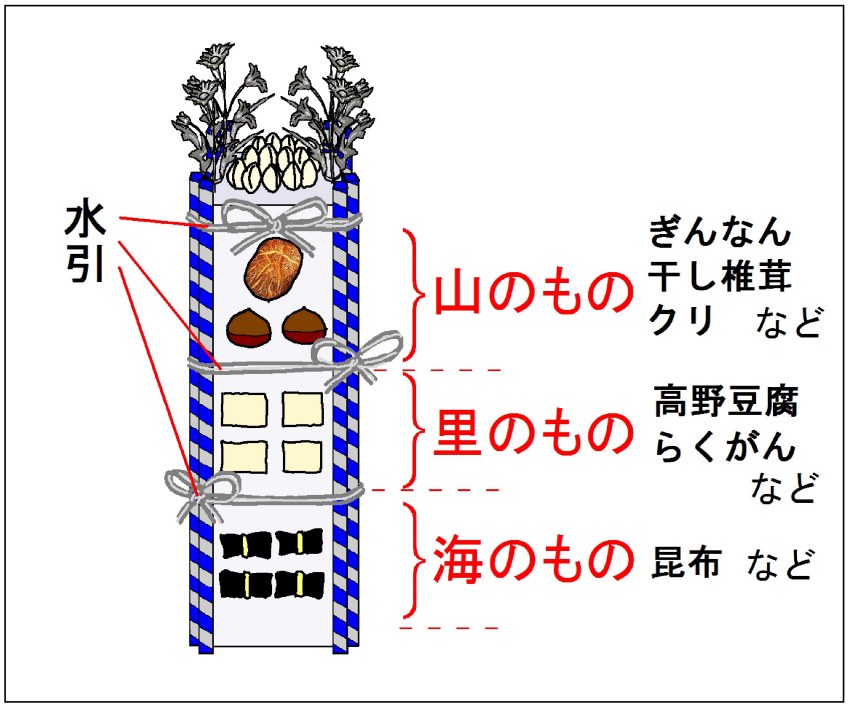
③本体の天井の四隅につける「花」

適当な大きさの造花を銀色に塗装して作ります。本体１つに４本（一対では合計８本）使います。（小さな紙華にしても良い。）

（花を取り付けるのは一番最後でも良い。錐（キリ）などで穴を開けて差し込みます。）



④本体に「供物」を貼り付けます。



供物は、底面以外の５面に貼り付けます。

貼り付ける供物は、山・里・海の乾物など、日持ちがするものです。干瓢や干菓子、飴なども用いられます。

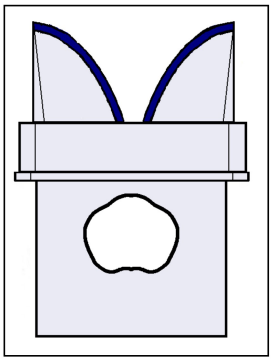
上から「山・里・海」の順に貼るという説と、「山・海・里」の順という説があります。

実際には供物を「どこに・何を貼り付けるか」という細かい規定はありませんので、制作者の自由な発想で飾り付けて下さい。

供物の貼り付けには両面テープや虫ピンでもできますが、「グルーガン」を使うと作業の能率が上がります。

出来上がった根菓餅は、濃銀（銀色）の「四方」（四角形の供笥）に載せます。

方立は銀色で、紺色の縁取りのものを用います。



「四方」

「グルーガン」

⑤銀色の「水引」を結びます。

銀色の水引を、本体１つにつき３本巻いて結びます。結び方に決まりはないようです。

上のイラストでは、結び目をずらしてみましたが、正面の中心線に揃えても構わないようです。

以上で根菓餅の完成です。

【材料のまとめ】　（根菓餅１対分）

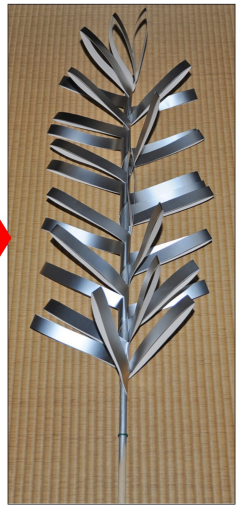
１）山・里・海の供物……適量
２）本体（タテ・ヨコ14cm、高さ43cmぐらいの立方体）……２個
３）般若木にする角棒（タテ・ヨコ1cm、長さ45cmくらい）……16本
４）造花（本体の上辺四隅に立てる）……８本
５）銀色の水引（または紐）
６）銀紙（本体に貼る。銀色塗料で代用できる。）
７）般若木に巻く銀テープ（１cm幅のもの。２cmのものを半分にしても良い。）
８）般若木に巻く青（紺）テープ（般若木全面に巻く）
９）銀色塗料（造花を塗装する）

必要な道具…ハサミ、セロハンテープまたは糊、両面テープまたはボンド、グルーガン　等

紙華（しか）の製作例

①金・銀の厚紙を二つ折りにして、切れ込みを入れます

②塗装した丸棒（または竹の棒）に巻き付けます。



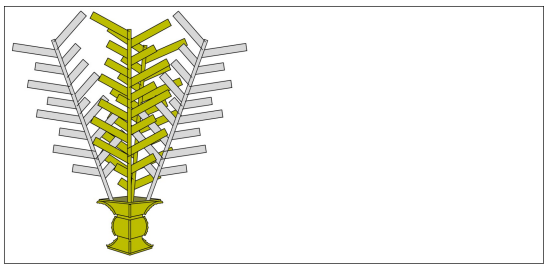
③完成

※裏表が無い紙の場合は、二つ折りにしないで製作しても良いでしょう。

※白い厚紙で作り、金・銀に塗装しても良いでしょう。

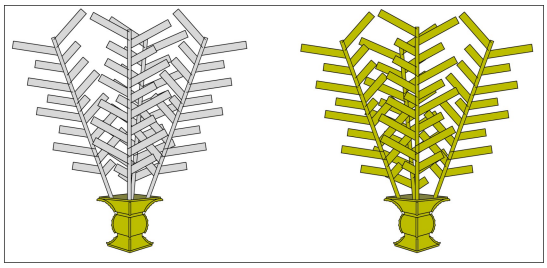
野卓の荘厳の一例

葬儀では、野卓（のじょく）に三具足・杉盛華束（銀の供笥）・根菓餅を配します。



野卓が三具足の場合は、花瓶に金を２本、銀を２本挿します。

中央（前後）に金の紙華を、左右に銀の紙華を挿します。



野卓が五具足の場合は、向かって左の花瓶に金の紙華を４本、右の花瓶に銀の紙華を４本挿します。